

## 煙洲鈴木達治先生米寿祝賀会の記

昭和二十二年煙洲先生の喜寿のお祝を盛大に挙行する計画があつたが、先生から七十七才位で祝つてもらいたくない八十八にでもなれば盛大に祝つてもらいたいと言はれたので当時は形だけのお祝にとどめた。後で先生にうかぐうと、どうせ八十八までは生きないだらうから盛大にやつてくれと言つておいても皆なに迷惑をかける様なことはないだらうとの事であつた。ところがいつの間にか八十八才を迎えることになつた。横浜工業会の理事会で米寿祝賀会の計画が議題となり盛大に挙行するには三味一体を標榜して育て、また横浜高等工業学校（現横浜国立大学工学部）横浜工業専修学校（現横浜工業高等学校）神奈川県立商工実習学校（現神奈川県立商工高等学校）三校同窓会が主催することとし、三十三年三月三校同窓会の幹部が集り、具体案を検討しとりあえず三校同窓生が集れる会場を決定することとなり

県立音楽堂が選ばれ、会場の都合で七月五日と決定し、夫々三校同窓会々員に周知賛同を得た。

### 記念事業

- 一、煙洲先生執筆になる「煙洲残筆」を出版し、広く配布する
- 二、祝賀会の模様を八ミリ映画に撮り贈呈する
- 三、祝賀会の模様テープに記録しテープレコーダーと共に贈呈する
- 四、祝賀会の記念写真帳を作成し贈呈する
- 五、金一封を贈呈する

祝賀会 七月五日午後二時—三時 県立音楽堂

祝宴 午後五時—七時 ホテル ニューグランド

右の如く決定した。

後に祝賀記念事業に蔵前高等工業学校門下生有志の方々が賛同されたことは本記念事業に一層輝しい花を添えることゝなつたことは誠によろこばしい事である。

煙洲鈴木達治先生米寿祝賀会

(昭和三年七月五日一三時より)

式 次 第

司 会 工 専 会 神 村 清 一 郎 氏  
一、母校音楽部演奏

(一) 横浜工業高等学校、商工高等学校合同演奏

指揮 横浜工業高等学校 菅 谷 昭 次 氏

1. 横浜高等工業学校校歌

2. 自由の園(エルキヤプタン)

3. 国民の象徴(キング)

(二) 横浜国大グリークラブ

指揮 磯 山 進 氏

1. 横浜国立大学学生歌

2. いざや吾等(ドイツ学生歌)

3. 記念祭の歌(メンデルスゾーン)

(三) 神奈川県立商工高等学校フラスバンド

指揮 国 田 正 氏

1. グラススリッパ

2. タンホイポー

二、開会 辞 商工実習 鈴木義雄氏

三、経過並記念事業報告 横浜工業会 鈴木洋二君

四、卒業生代表祝辞

(一) 横浜工業会 山口辰男君

(二) 商工実習 大須賀与喜三君

(三) 工 専 会 遠山栄雄君

五、記念品贈呈

(一) 三校代表右三名

(二) 横浜国大工学部教授会代表 永井彰一郎先生

六、来賓祝辭 鈴木京平先生

七、煙洲鈴木達治先生御挨拶

八、万才三唱 商工実習 松村善次郎君

九、閉会の辞 工専会 小竹豊春君

母校音楽部演奏

祝 宴 (昭和三年七月五日一七時より)

式 次第

司 会 横浜工業会 山口辰男君

一、開宴の辞 工専会 神村清一郎君

二、乾 杯 横浜工業会 阿部滋弘君

三、食 事

四、卒業生代表祝辭

(一) 横浜工業会 菅 要 助 君

(一) 商工実習 波谷三郎君

(二) 工專会 川村秀義君

五、来賓祝辞 野村洋三氏

六、煙洲鈴木達治先生挨拶

七、懇談

八、閉宴の辞 商工実習 野村常雄君

特に来賓祝辞を述べられたニューグランド会長野村洋三氏は煙洲先生より一年早く三十二年米寿迎をえられた方であるが力のこもった声の大きい祝辞には一同に大いなる感銘を与え特に煙洲先生を力づけ野村さんに負けてはおれじとこれ又老人とは思えない元氣を出して挨拶され老いて益々健在なる様子を如実に示し一同大いによろこびあつた。

参加者数は、音楽堂祝賀会 四五〇名

ニューグランド祝宴 六〇〇名

## 編集後記

煙洲先生の隨筆第四部の最終的編集を徹夜で終つた朝まだき、私の初孫が産声を挙げた。この煙洲殘筆の原稿を手にしたのは三三年の八月の暑い頃であつたが、五ヶ月を経て漸く編集のゴールに入つたのである。すでに一方では先生の原稿はほとんど全部三校を終つていたのである。というのは会員にお願いした原稿が集らなかつたからである。

これで私は先生の御著の編集を二度扱つたことになる。一つは戦後まもなく刊行した煙洲漫筆、そしてこの殘筆である。私は決して編集の専門家ではない全くの素人である。たゞまあ技術屋の仲間としたら多少人よりも余計に原稿書きをしているといった程度である。それなのに毎度、御著の刊行に當つているのは、いわば「好きこのんで」というのかもしい。今回の編集は、私としては、最も忙しかつた時期にぶつかつていて、寸暇をひねり出するのも困難な時期だつたのにもかゝらず、敢えて御引受けしたのは、私が先生の文章に接するのが楽しいからなのである。いふなれば「私の楽しみ」のために御引受けしたのであつて、先生にとつては、或は御迷惑であつたかも知れないのである。

不出来であつても御とがめを仰せられない先生の御寛容の袖にかくれて、自分の楽しみに  
ふけるなどは「以ての他」のそしりを免かれぬとは知りつゝも敢て御引受けした厚顔と無恥  
を、同窓諸兄は許して下さるかどうか。

それでも、先生の御氣に召すようなものと、弱い脳をずい分といじめつけたのである  
が、幸いに多くの同窓諸兄の御援助によつてどうやらこのようなものが出来上つたのであ  
るが、たゞたゞ先生の御寛容をお願いするだけである。

本書刊行に当り、装幀に御努力を願つた田辺謙輔さん、写真に腕を振るわれた柿沢さん、  
印刷製本に商売抜きにして協力下さつた山陽印刷さんとその田村社員にお礼申上げると共  
に、刊行の黒幕にあつて采配をふるわれた鈴木洋二さんはじめ米寿記念事業実行委員の皆さ  
ん方に厚い感謝の意を表する次第である。

昭和三十四年一月二十七日

山 口 辰 男 記